

エビデンス・ベースド・ソーシャルワークに対する提言

——質的研究の位置づけについて——

山岸 孝輝

1. はじめに——議論の概要——

筆者は日ごろの学びのなかで、実践における質的研究が、いささかぞんざいに扱われているように感じられる記述を見たことがある。たとえば、社会福祉士の新カリキュラム対応の教科書にはこのような記述が見られる。「科学的な根拠は、量的研究により因果関係が実証されなければならないため、事例研究だけでは科学的に実証された根拠とはならない」と。ここではわれわれの日常場面、すなわち具体的なコミュニケーションによって出来事が成立していく過程が、結果を導くための従属物へと貶められているのである。ソーシャルワークが過程によって成立するということはリッチモンドの時代から常々いわれていることであるはずだが、過程そのものを対象とした研究はあまりされていない。

近年、ソーシャルワークの研究分野にて活気を帯びてきている視座として「エビデンス・ベースド・ソーシャルワーク」（証拠に基づくソーシャルワーク。以下「EBS」）がある。この視座は、ソーシャルワーク実践においてできる限り実証的なデータをもとにして、クライアントに対して確実に効果が上がる介入を行なうための方法や過程を追求するものである。実証的なデータを用いたソーシャルワークをいち早く行なってきたのは行動変容アプローチの分野だが、EBSではこの実証性をさらにおし進めて、おのおの研究を体系的にまとめ、研究そのものの統一性をも高めていこうとするところに特徴がある。事例研究にありがちな落とし穴として、個々の事例で行われている介入方法や検証する視点が統一されておらず、結果として各研究を一本の線で繋げることができない事態がありうる。言い換えれば、一つの事例がその中で完結してしまっていて、ほかの研究者や実践家たちの実践や研究へと結びついていかないのである。EBSはそれぞれの実践や研究を繋ぐための枠組みを示したという点で、日本のソーシャルワーク研究を大きく変容させるきっかけを与えるものだといえるだろう。ところが、EBSが明らかにするのは実証性と実践、

研究とをいかに統合させるか、というところまでであり、やはりソーシャルワーク成立のために最も重要なファクターである過程についての視点を詳らかにしようとはしていない。本稿では、EBSの発想や方法について説明しつつ、現在のEBSに不十分な点があることを明らかにし、今後EBS研究が発展していくための道筋を示したい。

議論の流れを述べておこう。次章(2.)ではEBSがどのようなものなのかを、秋山薊二氏の論文「Evidence-Based ソーシャルワークの理念と方法」ⁱⁱⁱを紐解きながら明らかにしていく。秋山氏は日本でも最も早い時期にEBSの枠組みを体系的に示した論者である。また、筆者はこの論文以上に詳細なEBSの論述を日本の論文で見出すことはできなかった。EBSを検討するためには、これ以上ない有力な叩き台となるだろう。3. では2.をもとにしてEBSの枠組みに内包されている欠点を明るみに出し、議論の俎上へとのせることにする。そして4. において欠点を補完するための方策を示すことになる。

2. エビデンス・ベースド・ソーシャルワークの基本的発想

(1) エビデンスが叫ばれる理由

エビデンスはなぜ重要なのだろうか。秋山氏によれば、「ソーシャルワーク実践が演繹法(理論、論理、理念、思想)によって展開し、ソーシャルワークに含まれる調査法が軽視され、何の実証性も見られない記述的、論述的、理念的な研究に注目が払われていた」^{iv}からである。客観的な視点から確実な効果をもたらす実践について考察するという営みがほとんど行われてきておらず、「形式はともかく実体は価値、理論、視点、思想に依拠し、そこから引き出される権威に基づく実践が横溢している」^vることについての批判的な視点がそこにはある^v。その批判的精神は人づてに聞いただけの知識や仲間内でのルール、経験や信念をすべて「権威に基づくソーシャルワーク」と呼称するほどであり^{vi}、EBSとは「実証的根拠が曖昧で不明な情報を拒否すると同時に、権威に基づく実践、個人に特有な表現による実践を破壊するパラダイムである」^{vii}とまで述べている。

秋山氏が言う客観性というのは、実践における効果測定のみを指しているわけではない。氏の批判対象は研究に対しても向けられている。研究全体を取りまとめ、俯瞰することができるような巨視的視点からの研究がほとんど行なわれてきていないことを氏は指摘している。たとえば秋山氏は佐藤豊道氏による「社会福祉実践研究方法試論」^{viii}が高く評価されている^{ix}現状を「日本の調査の調査、研究の研究の遅れを物語っていることにもなる」^xという。佐藤氏の研究とは、相川書房から刊行されている季刊の研究誌『ソーシャルワーク研究』において1990年から2000年にかけて掲載されたすべての論文を渉猟し、用いられ

ている研究方法を類型化し、研究の数的な動向や各研究方法群の流れを探り、研究の評価方法について検討するというものである。このような研究は学会のトレンドを探るためには必要であった研究の一つであり、文献学的にも大きな功績であると思われる。しかし、この研究で用いられている評価の尺度というのはまだ試行段階のものであり、実際に妥当性があるのかどうかはわからない。それゆえ、希少価値の高い研究であるものの、研究方法として不完全な面があったことも否定できない。秋山氏が指摘するのも、そういった点からだと考えられる。

ソーシャルワークという専門的な実践行為が当て推量だけによって行なわれるのは唾棄すべきことである。それは多少ソーシャルワークや社会福祉実践を学んだ人ならば誰でもわかることだろう。ところが、この言説にしたがって確実な実践をしていくための方法が議論され、実際に試行されたかという、どうやらそうでもないということになる。実践における効果測定も、研究における全体的な動向や評価尺度も一致しておらず、おのおの実践・研究が点のままで終始している現状があるといえるだろう。EBSの議論が叫ばれるのは、このような点として浮遊している実践や研究を線として、あるいはシステムの面として繋げていくことへのアプローチとみることができる。

(2) 秋山論文における EBS の理念的枠組み

引き続き秋山氏の論文をベースとして EBS の枠組みについて説明していこう。

EBS の基本視点として、秋山氏はエコシステム理論を採用している。エコシステム論とは、日本では太田義弘氏^{xi}や佐藤豊道氏^{xii}、秋山薊二氏^{xiii}らによって研究が進められている視点で、「一般システム論とエコロジーの融合」によって人と環境との相互作用のシステムティックに分析することを可能とする視点である。

ただし、環境と人との相互作用をソーシャルワークで援用する際、それは何らかの形に加工して用いられなければならない。秋山氏は分析のための 3 つの視点を挙げる。Epidemiology (疫学)・Aetiology (原因論)・Resiliency (障碍克服力) である^{xiv}。これらのうち疫学については医学的ニュアンスが強いため、人間生活環境空間監視 (Habitat Surveillance : ハビタット監視) という表現に置き換えられている^{xv}。

疫学、すなわちハビタット監視とは、「環境を構成する、社会、文化、地域、家族、人間関係、人間の特性からくる特異な社会問題の特徴を監視しながら、問題特性を発見すること」^{xvi}だと秋山氏は説明している。問題特性の発見は統計学的に行なわれる^{xvii}。

原因論とは、ハビタット監視によって明らかになった「問題の発生環境特性から原因を

特定することである」^{xviii}。この視点による原因の発見は、ソーシャルワーク実践を問題解決から問題発生予防へと導くことになる。

障碍克服力とは「謎の要素 X」とも呼ばれ、「劣悪な環境に育ちながらも健全な自立生活を維持する者と生活問題を抱える者」という分断をもたらす「何かの要素」の働き^{xix}（秋山，2005：128）を指す。この要素の具体的なところについては明らかになっておらず、コーホート研究などの長期調査によって明らかにしていく必要がある。

ハビタット監視、原因論、障碍克服力という3つの分析視点からどのような介入法を用いるのかを明確にし、その介入法の実証性を検証する段階に入っていくのである。

まずは前項で取り上げた視点を基点に、環境要因や質的調査、科学情報によって想定されたインターベンションがRCT（Randomized Controlled Trial：無作為制御調査。以下「RCT」）によって実施される。この調査は定められたプロトコル（Protocol：事前計画）によって行なわれ、結果は数値化して統計学的に解析される。解析されたデータは既存の調査研究の中にプーリングされ、メタ・アナリシス（meta-analysis）のための重要なプロトコルとして作用する。プロトコルに基準を設け、それにかなう調査結果を照合して評価、要約する研究はシステマティック・レビュー（systematic review：体系的再調査検討）と呼ばれ、科学的により厳格な調査のみをふるいにかけて抽出し、それぞれの結果をとりまとめ、客観性の高い証拠を導き出す方法である。実際このシステマティック・レビューはEBSにおいてもっとも実証性や証拠能力・情報提供力の高い研究方法であり^{xx}、この研究方法を容易にするための共同計画やWebサイトも存在している。かくして効果があるインターベンションと見なされた方法は実証証拠とみなされ、一般的に使用することができるインターベンションであるかどうかのテストが行なわれる。テストによって効果が認められたインターベンションのみが、一般化・汎用化が可能なインターベンションであるとされ、その方法は広く普及させられることとなる^{xxi}。

EBSの枠組みは、それぞれの場面における介入の結果を調査するだけでなく、それらの結果をまとめ合わせてさらに精密なデータを提供しようとするシステムのにも複雑な研究方法だといえる。それだけに、EBSや、突き詰めれば保健や公衆衛生のエビデンスを示すための独自の概念がふんだんに用いられている。そもそもエビデンスを精密な統計学的研究によって解き明かそうとしたのは医療分野からであり、その流れを受け継いだ研究方法がEBSにおいても若干加工した上で使われているというのが定説になっている^{xxii}。

3. エビデンス・ベースド・ソーシャルワークへの批判的検討

これまでの議論で見てきた EBS の諸理論家たちのパースペクティブを考慮するならば、EBS の発想において質的側面が軽視されているとする冒頭の仮説は誤っているといえるかもしれない。ところが、個人的な主観によって研究者が質的研究を軽んじていなかったとしても、現実の研究枠組みのなかで質的研究を有効に位置づけることができていないのならば、それは軽視されていることと何ら変わらないといえる。以下、EBS の理念枠組みにおける質的研究の位置付け方に対して疑義を投げかけてみよう。

第一に、質的研究が軽視されているわけではないにしても、現在の EBS の枠組みにおける質的研究は量的研究を行なう前段階に位置しており、結果的に従属していることと同じことになってしまっているという点である。介入の良し悪しを判断する根拠が介入効果や効果の確実さやその有無に置かれる EBS の観点から言えば、質的研究だけ介入方法を確定させることができないということはわかる。それにもかかわらず、クライアントの個性やさまざまな場面で織りなされる対話行為には、同じものは一つとして存在しないという独自性があり、そこに焦点を当てる質的研究を棄却することはできない。だからこそ、秋山氏は EBS の基本構想として「障碍克服力」というファクターを置き、量的研究を始める前段階に質的研究を置いたのだ。秋山氏がかつて「アートとしての援助技法」というタイトルで、クライアントとワーカーによって創造される作品としての援助のあり方を強調していた^{xxiii}ことは、氏が質的研究を軽視しているわけではないという大きな証拠となるだろう。しかしながら、アートや作品という言葉を比喩的な表現であるにしる用いたのであれば、ソーシャルワークの研究者はそれらの作品の評議員であり、その作品を徹底的に分析しなければならないはずだろう。つまり、個別の事例で織りなされているコミュニケーション行為そのものを力動的に分析するという視点が求められてくるのである。現行の EBS が評価の尺度としているのは、ある時点での固定的なデータであり、それを数量化することによって万人に同じ理解を促すことを志向しており、そのことだけでは批判すべき点は見当たらない。むしろ、ソーシャルワークを学問として確立させていくためには必要な作業といえる。反面、ソーシャルワークがクライアントやコミュニティなどの社会に働きかけるものであるということを考慮するならば、EBS は働きかける「過程」そのものに対する視点が弱いといわなければならない。ソーシャルワークが行われる場では必ず何らかの対話的なやりとりが進行しているはずであり、それがなければソーシャルワークは成立しない。しからば、その対話的場面をソーシャルな側面から分析することが求められる。この分析には紛れもなく質的研究のパースペクティブが求められ、量的研究の介入する余

地はない。量的研究の前座として質的研究を置く試みは、研究範囲の相違からも正当なものとは思われない。

第2に、EBSにおける量的研究重視の枠組みそのものが権威として作用し得るという点を見逃すことはできない。特に、社会構成主義的な視点に立つ論者の多くは堅いデータの実証性に対する反発からその立ち位置にいる^{xxiv}がゆえ、この点については今一度検証の余地があるのではないかと考えられる。

EBS論者のなかでも、秋山氏は権威に基づく実践を徹底的に否定する。「権威の否定」という点においては、氏も社会構成主義も同じ立ち位置にいる。しかし、権威をどのように捉えているかを見てみると、両者の違いが鮮明に浮き上がる。秋山論文における権威とは、客観的、あるいは実証的でないものと見なすことができ、当て推量での介入を敵視していることをうかがわせる。一方で社会構成主義の立場に立つならば、実証性を導き出すための専門的な方法論そのものを権威（権力）として否定する。このような測定法は専門家集団の中でのみ成立するものであり、現実には不適応を抱え、ヴァルネラブルな状態にある人たちをあるがままに示していない、と。

実証主義的な立場と社会構成主義的な立場によるこのような違いは、日本においてもある程度の議論はされている^{xxv}。しかし権威に対する捉え方が完全にすれ違っているために、収束する点が存在しない。加えて問題を大きくしているのは、両方の立場の議論がそれぞれ正しいということである。つまり、互いの論者にボタンのかけ違いが見られるのである。秋山氏は「とにかく新しいものは批判にさらされる」^{xxvi}と述べているが、このような表面的な見方とでは片づけられない根深い問題が内包されていると考えられる。議論の着地点がうまく見いだせないのならば、より積極的な議論を行なうことが求められてくる。浅墓な視野から互いが互いのパースペクティブを退け合うことは、学問領域としてのソーシャルワーク研究を空中分解させてしまうことになるのではないか。

4. エビデンス・ベースド・ソーシャルワーク研究発展に向けての提言

あえて乱暴な問いかけをしてみよう。エビデンスが量的な確実性だけを指す言葉として使用されることが果たして正当であるのか、と。

EBSの論者が明らかにしようとしているのは客観的証拠、量的に測定できるものであり、それをエビデンスとしている節が見受けられる。彼らのパースペクティブに立てば、客観的な実証性が明らかになっている研究があまりにも少ないがため、ベースとするエビデンスを客観的な実証性に限定しているといえるだろう。ところが、もしもエビデンスという言葉

葉がこのような側面にばかり使われるようになるのならば、視野が狭いと指摘しなければならない。もちろん彼らは客観的実証的なエビデンスばかりを強調しているのではなく、このようなエビデンスはソーシャルワーク実践の一部にすぎないということについても自覚的である。ただし、質的な研究、すなわちクライアントそれぞれに個別な世界を解明するための枠組みが構築されないのであれば、結局は質的研究を軽視しているのと同じ結果を招いてしまうことになる。

前の章で2つの課題を挙げたが、その根本的な原因となってしまうのは、質的研究の立ち位置である。質的研究を実証性測定の前哨にしてしまったことで、質的研究に関するエビデンスを検証するための視点が弱くなってしまっている。

質的研究には、量的研究と共通する点がある反面で、決定的に相違する点もある。それを考慮するのであれば、質的研究に関するエビデンスを明らかにするための理念的枠組みを別に構築し、量的・実証的研究に関するエビデンスを明らかにする枠組みとの接点を見つけ出していくという視座が必要である。もちろん質的研究の枠組みは幅広く、体系化は量的研究に比べて遅れをとっていることは疑えない。それでも、実証的な EBS の枠組みにあまり深く言及することなく質的研究を投げ込んでしまうことは、いささか勇み足であるといえる。ソーシャルワーカーのアイデンティティや倫理的領域にも足を踏み入れるような研究であるだけに、枠組みの構築は慎重に行なっていく必要がある。

5. おわりに

この研究の課題を3点あげておきたい。

第1に、文献の出典が偏ってしまったことである。大半を『ソーシャルワーク研究』誌から引用・参考にしており、そのほかの論文の収集にまで足を伸ばすことができなかった。本来、文献研究とは、検証したい事象をテーマとした論文をすべて集め、詳細に検討したうえで結論を導かなければならない。実際、出版社によっても思想やイデオロギーに差があるため、参考とする出版社を偏らせることも大いに問題とされなければならないだろう。そういった意味で、本稿は極めて不完全な文献研究であり、信頼性についても留保をつけなければならない。

第2に、海外の EBS 研究にまで手が回らなかったことである。これについては完全に筆者の語学力のなさに基づくものであり、批判は真摯に受け止めなければならない。秋山氏も「日本に EBP、EBS を導入するには高いハードルがある。それは語学力、高度な調査統計学的知識、インターネットの検索技術であろう」^{xxvii}と述べているが、筆者はそれら

のハードルを越えることができていないということになるだろう。秋山氏はハードルを越えた研究者である。今後は秋山氏が没頭したアメリカの諸研究にも着目して、EBSを検証していく必要がある。

第3に、筆者が結論づけた第2の結論、すなわち、権威的なソーシャルワークを排除するために提唱されたEBS事態に内包される権威の存在については、もっと深く研究する余地があるということである。ここにはEBSに依拠する論者とまた別の流れに属する論者（特に社会構成主義に立つ論者）とのあいだにある亀裂が何であるのかを明らかにするためのヒントが隠されているように思われる。この亀裂を埋めていく作業は、量的研究と質的研究のバランスをとるためにも、EBSが量的側面に偏らないようにするためにも重要になってくるだろう。以降も追って研究を続けていきたい。

この論文は筆者の名寄市立大学における平成22年度卒業研究「秋山薊二論文におけるEBS (Evidence-Based Social work) の理念枠組みに対する批判的検討——社会構成主義的な視座から——」（名寄市立大学、2011年夏ごろ、インターネットを通じて閲覧可能になる予定）をもとにして、表現を大幅に変更しつつ書き直したものである。より詳細な議論を望む読者の方々には、ぜひ卒業研究のほうもご覧いただきたい。

註

- ⁱ 岡田まり「事例研究・事例分析」社会福祉士養成講座編集委員会編『新・社会福祉士養成講座8 相談援助の理論と方法』中央法規出版、2009年、258頁。
- ⁱⁱ リッチモンドによるソーシャル・ケースワークの仮説的定義。「ソーシャル・ケース・ワークは人間と社会環境との間を個別に、意識的に調整することを通してパーソナリティを発達させる諸過程からなり立っている」。Richmond, M. E. *What is Social Case Work? An Introductory Description*. New York: Russell Sage Foundation, 1922. (小松源助訳『ソーシャル・ケース・ワークとは何か』中央法規出版、1991年、57頁)
- ⁱⁱⁱ 秋山薊二「Evidence-Based ソーシャルワークの理念と方法—証拠に基づくソーシャルワーク (EBS) によるパラダイム変換—」『ソーシャルワーク研究』第31巻第2号、相川書房、2005年、124-132頁。なお、秋山氏はEBSをテーマにしたホームページ (<http://home.kanto-gakuin.ac.jp/~akiyak2>) を開設しており、PDFファイル形式での論文をかなり多く閲覧することができる。
- ^{iv} 秋山前掲論文、124頁。
- ^v 同上。
- ^{vi} 秋山氏は前掲した論文のなかで、Gambrill から引用して、実践方法について理由を問われた時の9つの回答を「権威に基づく実践」として示している。すなわち「①フロイトの理論によれば、このように行うことになっている。(高名な理論家・研究者もしくは理論の名前を使う) / ②テキスト・マニュアルにはこのようにすべきと書いてある。 / ③スーパーバイザーからこのようにすべきと解説・指導された。 / ④先輩のワーカーからこのように行うよう指導された。 / ⑤私の組織 (施設) ではこのように行うことになっている。 / ⑥ケース研究会に出た結果、このやり方がよいと多くの人が言っていたから。 / ⑦多くのワーカーがこのように行っている。 / ⑧経験からこのように行うことが一番よいから。 / ⑨私の信念でこのように行っている。 [改行はスラッシュで示した、引用者註]

- vii 秋山前掲論文、126 頁。
- viii 佐藤豊道「社会福祉実践研究方法試論」仲村優一・窪田暁子・岡本民夫他編『講座 戦後社会福祉の総括と二一世紀への展望 IV 実践方法と援助技術』ドメス出版、2002 年、83-105 頁。
- ix 仲村優一氏は佐藤氏の研究を「総体的には『福祉サービスとソーシャルワーク』の範疇に属する研究とみてよいであろうが、この半世紀の終わりの時点でのソーシャルワーク研究の水準を示す貴重な研究である」と評価している（仲村優一「戦後社会福祉とソーシャルワーク」仲村優一・窪田暁子・岡本民夫他編『講座 戦後社会福祉の総括と二一世紀への展望 IV 実践方法と援助技術』ドメス出版、2002 年、5-16 頁）。
- x 秋山前掲論文、126 頁。
- xi たとえば、太田義弘『ソーシャル・ワーク実践とエコシステム』誠信書房、1992 年。
- xii たとえば、佐藤豊道『ジェネラリスト・ソーシャルワーク研究』川島書店、2001 年。
- xiii たとえば、太田義弘・秋山薊二編『ジェネラル・ソーシャルワーク—社会福祉援助技術論—』（初版訂正第 4 刷）光生館、2002 年。
- xiv 秋山前掲論文「Evidence-Based ソーシャルワークの理念と方法—証拠に基づくソーシャルワーク (EBS) によるパラダイム変換—」126 頁。
- xv 秋山前掲論文、126-127 頁。
- xvi 秋山前掲論文、126 頁。
- xvii 同上。
- xviii 秋山前掲論文、127 頁。
- xix 秋山前掲論文、128 頁。
- xx 秋山薊二「エビデンスに基づくソーシャルワーク (EBP, EBS) に対する誤解の諸相—EBS の実相と PBR—」『関東学院大学文学部 紀要』第 112 号、関東学院大学、2007 年、80-81 頁に依拠しているが、これは秋山氏がマクニースとタイヤーの論文から秋山氏が引用したものである。引用元は、McNeece, C. A. & Thyer, B. A., 2004. Evidence-Based Practice and Social Work. *Journal of Evidence-Based Social Work*, 1(1), 7-23.
- xxi この段落の記述は、秋山前掲論文「Evidence-Based ソーシャルワークの理念と方法—証拠に基づくソーシャルワーク (EBS) によるパラダイム変換—」126-130 頁をもとにして、議論に必要な範囲で筆者がまとめたものである。
- xxii 主に秋山前掲論文、125 頁や三島亜紀子『社会福祉学の(科学)性 ソーシャルワーカーは専門職か?』勁草書房の 181 頁、佐藤豊道「エビデンス・ベースド・ソーシャルワーク—成立の過程と意義—」『ソーシャルワーク研究』第 34 巻第 1 号、相川書房、2008 年の 4 頁など。ただし、三島氏は EBS が根拠に基づく医療 (EBM: Evidence-Based Medicine) の影響を受けているということが当然のように語られる現状に異議を唱えており、アメリカにおける EBS の境遇を概観しつつ、「ケアマネジメントの普及やパフォーマンス志向の高まり、そしてアメリカにおいてはソーシャルワーカーを相手取った訴訟数の増加などを受けた専門家を取り巻く環境の変化のなか、エビデンスへの視線は熱いものになった経緯がある」（三島前掲書、190 頁）と自説を唱えている。
- xxiii 秋山薊二「アートとしての援助技法」太田義弘・秋山薊二編『ジェネラル・ソーシャルワーク—社会福祉援助技術論—』（初版訂正第 4 刷）光生館、2002 年、139-152 頁。秋山氏はたとえば、このような記述を行なっている。「両者 [ワーカーとクライアント、引用者註] に内在する個性、創造性、独創性を生かすのであれば、援助活動はワーカーとクライアントの創る作品 (アート) となるといっても過言ではないであろう」(141 頁)。
- xxiv 社会構成主義の立場からナラティブ・アプローチにおける効果測定法を提唱する加茂陽氏は、社会構成主義のなかでも特に量的研究に対して懐疑的な物語モデルの論者たちについて、「彼ら [社会構成主義のなかでも特にラディカルな実践モデルである「物語モデル」の論者たち、引用者註] は数量的効果分析には「語り」が存在しないことをしばしば批判し、数字では説明がつかない人の世界構成法についての枠組みを下敷きにして、クライアントと他者との語り合いの中に新たな構成の可能性を読み込もうとする」(加茂陽「ヒューマンサービスにおける効果測定法の素描」加茂陽・中谷隆編『ヒューマンサービス調査法を学ぶ人のために』世界思想社、2008 年、13-66 頁) と指摘し、そのようなパースペクティブに至る理由として、ソーシャルワーカーの客観的判断によるアセスメントからプランニング、介入という流れをくむ従来型の理論は「援助関係を通して自らの説明に合致する現実を作り出し、自己増殖していく」ものであり、「論理構成のレベルにおいても検証のレベルでも、矛盾を抱えていて、科学性の根拠である論理と実証の両面でその根拠を喪失していた」(加茂陽「ソーシャルワーク理論と実践」加茂陽編『ソーシャルワーク理論を学ぶ人のために』世界思想社、2000 年、3-24 頁) からだとしている。
- xxv たとえば、2000 年に加茂陽氏によって編まれた『ソーシャルワーク理論を学ぶ人のために』(世界思

想社)では、行動変容アプローチの三原博光氏と物語モデルの木原活信氏の論文が掲載されたのとともに、三原氏によって木原論文に対する反論が提示され、その反論に対して木原氏が応答するというやりとりが記されている。

xxvi 秋山 薊二「Evidence-Based ソーシャルワークの理念と方法—証拠に基づくソーシャルワーク (EBS) によるパラダイム変換—」、131 頁。

xxvii 秋山 薊二「Evidence-Based ソーシャルワークの理念と方法—証拠に基づくソーシャルワーク (EBS) によるパラダイム変換—」、131 頁。